
...逢魔ヶ時...

篠原 ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

…逢魔ヶ時…

【Nコード】

N7083E

【作者名】

篠原 ひなた

【あらすじ】

誰そ彼は。さふ問ひかけずにはゐられぬやふな夕暮れを、少年が二人、歩ひてゐる。互ひの温もりを頼りに、彼らは生きてゐくのだ。不意に襲ひ来る魔に慄きながらも・・・

（前書き）

歴史的仮名づかいを意図的に使用しています。

「何処にでも、また何時でもいます。

御氣をつけなさい。

御氣をつけなさい……」

芥川 龍之介『神々の微笑』

- - - - -

誰ぞ彼は。

問ひかけすら意味を失ふやふな黄昏の中を、影が並んで歩いてゐた。

地を覆ひつゝ在る滲んだ紅に、どちらともなく繋がれた手が揺れる。

他愛もない話を取留めもなく続ける変声期も遠ひ高音と、時に弾ける笑ひ声、地を踏みゆく足音が、他の音を総て奪ふ。

子どもと云ふには少し大人びた、大人と云ふには若ひ姿の。

逢魔ヶ時には馴染まぬやふな、其れでゐて妙に嵌っているやふな。

残照に歪められた二つの影は、少年の形をしてゐた。

嗚呼、亦…だ

被つた笑みをそのまゝに、烏羽色の髪を一つに束ねし少年は、胸中に於て嘆息した。

日常に、忍び込む魔。

底が抜けたやふな、青空に。
腕によりをかけた、食卓に。
装ひも艶やかに咲ふ、紅葉に。

此のやふに安定を欠ひた刹那には、無自覚の隙をつきて力を伸ばした魔が暴れ出すのだ。

知りながら忘れてゐた自己の不明を、少年は悔ひた。

こぼれさふな哭声を押し殺した笑みは、少年の双眸を取り残してゐた。

ひたひたと身を侵しけるは、
道^いひやふもなき、かなしさ。

悲しさか
哀しさか
愛しさか

いらへは莫く。

唯問いかけのみが少年の内に渦を作った。

常には睨と地を躡む足も、今は遠い。

否。

さふでは莫い。

足が、遠いのでは莫い。

遠い、と感じた一瞬さへも。

矢張り感覚の悪戯に過ぎぬ。

地と云ふものこそ、今比の時に崩れゆきつゝあるのではないかと、
睿^{さと}き頭が少年に道った。

去り行く足音も高らかに、置き去りに為れたやふにも思へて。

少年は、行き所もない恐怖に戦慄く片手を、握り絞めることで黙
らせた。

繋ぎし手には、氣どられぬやふに。

息さへ儘ならぬ我が身を平常通り觀せやふと、そ知らぬふりで掌
に爪さへ立てる。

チリと伝ふ痛みが、僅かに恐怖の重みを減らしたやふにも感じら
れて、少年は唇を笑みの形に留めた。

「なあ」

隣をゆきし少年の、怪訝さふな呼こえが、黒を纏ふ少年を黄昏の中に引き戻した。

「聞ひてゐるのか」

普段と変わらぬ高音は、救ひのやふに少年を満たし。臓腑に伸し掛つてゐた重ひ氷のやふなものは、何処へともなく熄きえてゐた。

息を思ひ切りたくなるやうな世界の揺らきも、今は遠く。聞ひてゐました、と頷きを返した少年と共に、烏羽色の髪も揺れた。

頂くすくを擽る髪に、感覚が世界を取り戻す。

震えの治まつた掌は、握り絞めた其の儘で。
原因さへも分からぬやふな些細な事に、此程迄これほどまでに踊らされた自分の滑稽さに、苦々しさを覚へる。

弱さを、嘲るやふに。

奇妙に青ざめた唇が、笑った。

まさしくその時のことであつた。

繋ひでいた手に、氣遣ふやふな優しさで強く握られたのは。掌を伝ふ温もりに命すらも包みこまれたやふに思へて、少年は長く息をつひた。

さふして漸く、彼は気づく。

嗚呼、さふか

息を思ひ切る程に戦慄き乍ら^{なが}
痛みに逃げて誤魔化し乍ら

此の儘でも自分は

生きてきた

生きている

さふして、生きてゆけるのだ。

照らし出された事實は、残酷な迄に優しく少年を打ちのめした。
されども、そこで足を止めるには包み込む温もりが優しすぎた。
なればこそ。氣遣ふやふな眼差しに軀全部で少年は笑ったのだっ
た。

大丈夫ですよ、と。

陽は最早遠く、夜の帳が降りかけていた。

二つの影は、宵闇の中を真つ直ぐに

迷ふことなく、歩きはじめた。

（後書き）

はじめまして。もしくは、お久しぶりです。

水音灯と申します。

あなたがそこに居てくださることが嬉しいです。

この物語を読んでくださってありがとうございます。

どうしても歴史的仮名づかいで書きたかった作品なのですが、なにぶん明治・大正期の書物を何冊か読んだだけの浅薄な知識ですので間違いも多くあるのではないかと思います。

誤字・脱字・文法上の誤り、読みづらい漢字などを発見されましたら、ぜひともご指摘ください。

また、ご感想、ご批評などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7083e/>

...逢魔ヶ時...

2010年10月10日06時16分発行